

テキサス工科大学ダスグプタ先生をお招きして

徳島大学薬学部 田中 秀治

はじめに

2002年9月7日から同15日までの9日間、徳島大学藤井・大塚国際教育研究交流資金の外国人研究者短期招聘助成金を得て、テキサス工科大学(Texas Tech University)のPurnendu K. Dasgupta 教授(愛称 Sandy)を徳島大学にお招きした。また、この機会を利用して、岡山大学理学部および熊本大学理学部において同教授の講演会が開催された。

今回の招聘の背景には、筆者が文部省長期在外研究員として1999年6月16日から2000年2月15日までの8か月間、テキサス工科大学に留学したことがある。渡米中、Dasgupta 先生には公私にわたって大変お世話になり、いつの日か彼を徳島にお招きしたいと思った。なお、筆者の留学までの経緯や、テキサス州、ラボック市、テキサス工科大学、Dasgupta 研などへの印象は、拙著「米国テキサス工科大学(P.K. Dasgupta 研究室)滞在記」(*J. Flow Inject Anal.*, 17(2), 207-209 (2000))をご覧くださいければ幸いです。

藤井・大塚資金

「藤井・大塚国際教育研究交流資金」は、藤井節郎記念大阪基礎医学研究奨励会、大塚製薬および大塚製薬工場の3法人からの奨学寄付金をもとに1988年に発足した。徳島大学の医歯薬分野における、1) 外国人研究者招聘、2) 外国人若手研究員受け入れ、3) 外国人留学生への奨学金支給、が主な事業内容である。今回の招聘の公式的な目的は、筆者が行っている「フィードバック制御流量比法とその分析化学的応用」に関して共同研究を行うというものであった。

本資金は徳島大学への助成を趣旨としているため、被招聘者の他機関への訪問となるとさまざまな制約がある。加えて、文部科学省長期在外研究並みの多くの書類提出が求められるため、応募者は意外なほど少ない。したがって、応募の時点でそれなりの目算はあった。しかし、昨年12月末に電子メールで最初の相談を行って以来、Dasgupta 先生をはじめ関係者との通信や各種提出書類の写しだけでA4の紙ファイルがぎっしりと埋まるほどで、同先生を無事にお送りした後の数日間は虚脱感さえ感じた。日程調整も、岡山大理の本水昌二先生ならびに熊本大理の戸田敬先生の御理解と御協力を得て、事務局から規則に抵触するとのお叱りを受けない程度に、何とかプランを作成できた。

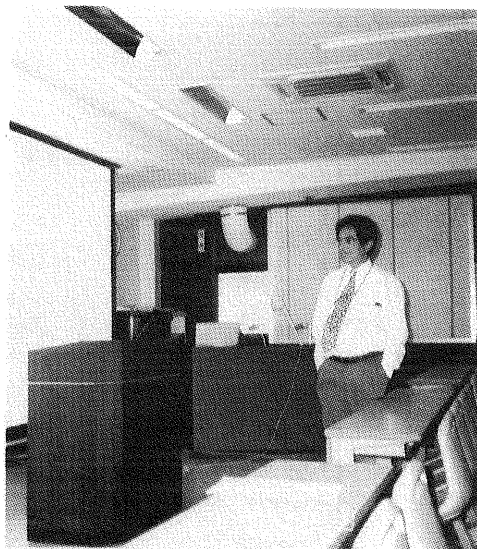


写真1 徳島大学薬学部での講演会

関空から徳島へ

日本時間で9月6日の22:00にLubbock International Airportを発たれたDasgupta先生は、Dallas/Fort WorthおよびLos Angeles各空港を経て、予定より1時間早く7日の17:30に関西国際空港に到着された。各便のフライト状況や到着予定時刻はインターネットで把握でき、便利になったものである。Dasgupta先生は昨年8月のICAS 2001で招待講演のため来日され、その際、岡田哲男先生(東京工大)や久松由東先生(国立公衆衛生院)のお世話でTexas Tech同窓会や講演会も開催された。したがって、同先生とは約1年ぶりの再会であった。Dasgupta先生は、20時間を超える旅の疲れを感じさせない、エネルギッシュな雰囲気には溢れていた。彼からは日本円の入った封筒を手渡された。これは、藤井・大塚助成金の支給が後日の精算払いとなるため、筆者が当面立て替えねばならない支出を補うためであった。筆者が準備したお金も、「実際に助成金が支給されてからでよい」とのことを受け取っていただけなかった。彼の優しい、細やかな心遣いに感激した。

徳島大学では藤井・大塚助成金に関する諸事務手続き、薬学部長との懇談を行った後、筆者が所属する薬品分析学教室で実験設備を御覧いただいた。大学院生を交えて研究のディスカッションを行った。筆者が現在進めている流量比法 flow ratiometryによる薬物の分配係数や解



写真2 回転寿司レストランにて
まさに automated batch analysis である。(左から順に、
筆者, Dasgupta 教授, 大学院生 (有塚桐子, 橋貴寛, 森充
史 各氏)

離定数の測定の研究に関して貴重な助言をいただいた。
また、教職員や大学院生を対象に”Analytical Chemistry
with Drops and Flow”と題して、講演を行っていただ
いた(写真 1)。液滴を利用した抽出や二次元的な液の流れを
捉えたビデオ映像がクラシック音楽と共に流れた時は、
聴衆から感嘆の声が漏れた。毎日夕方にはノート型パソ
コンをインターネットに接続され、1 時間以上かけてメ
ールの返事や書類作成をされていた。御多忙な Dasgupta
先生の生活の一端がうかがわれた。

大学院生をお供に、回転寿司レストランに行ったのも
良き思い出である(写真 2)。自動バッチ分析法のようなも
のと説明すると、納得されていた。休日や”共同研究”の
合間?を利用して、近隣の観光地にも出かけた。明石海



写真4 大塚国際美術館, システィーナ ホール
ミケランジェロ「最後の審判」の前で

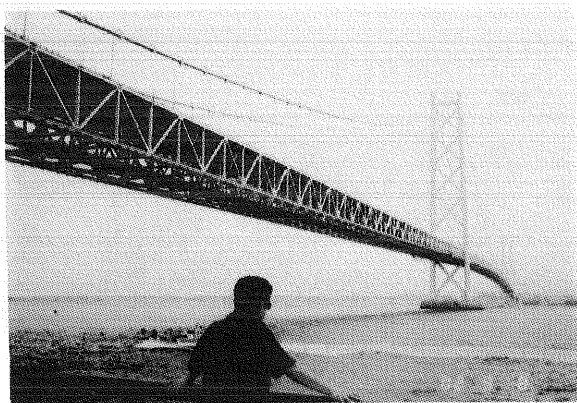


写真3 明石海峡を見つめる Sandy (淡路島にて)

峡大橋(写真 3)、北淡町震災記念館(淡路島)、渦の道(大鳴
門橋の道路下に設置され、ガラス張りの床から 40m 下の
うず潮を眺めることができる)、大谷焼窯元、霊仙寺(四
国 88 番霊場の第 1 番札所)、眉山... 中でも 1,000 点以
上の西洋名画を陶板上に原寸で忠実に再現した大塚国際
美術館には大変喜んでいただけたようで、我々はそこで
5 時間以上を過ごした(写真 4)。

岡山大学そして熊本大学への訪問

Dasgupta 先生は 9 月 11 日には瀬戸大橋を經由して岡
山大学理学部へと向かわれた。そこでは日本分析化学会
中国四国支部外国人学者講演会として”Automated
Atmospheric Trace Gas and Particle Composition
Measurement with Ion chromatography Based
Instrumentation”と題した講演を行われた(写真 5)。筆者
は講演会の前に徳島へと戻らねばならなかった。以下は
出席者からお伺いした話である。冒頭で平田静子中国四

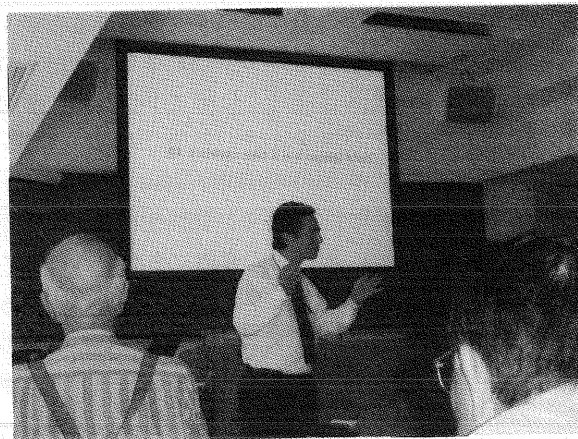


写真5 岡山大学理学部での講演会
学生やポストクの突拍子もないアイデアに対し、Dasgupta
先生は「何をばかげたことを…」と最初は言われる。でも、
実際に良い結果が出てくると、「それはすばらしいアイデア
だっていつも言っているだろ」(スライド参照)とおっしゃる
そうである。(講演の中ほどでのジョーク)

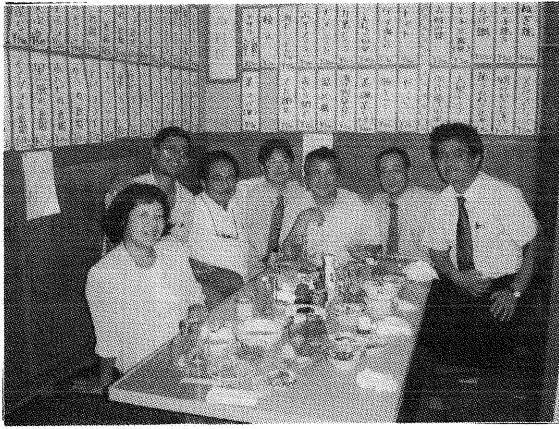


写真6 岡山での懇親会
Dasgupta 先生(左から 3 人目)を囲んで、平田、Karthikeyan、手嶋、本水、酒井、樋口の各氏(敬称略)

国支部長が挨拶された。同講演会の世話人である本水先生の御尽力で、桐榮恭二名誉教授、大島光子先生ら岡山大理の皆様、近くは岡山理科大の善木道雄先生と横山崇先生、遠くは愛知工大の酒井忠雄先生・手嶋紀雄先生、産総研中国センターからは平田先生に加えて Sathrugnan Karthikeyan 博士、エフ・アイ・エー機器(株)の樋口慶郎氏ら多数の方々に参加され、講演会は盛大なものとなり、活発な議論が交わされた。居酒屋での懇親会も大いに盛り上がった(写真 6)。現在、Dasgupta 研には岡山大理の高柳俊夫先生と神奈川工科大の竹内政樹博士が留学されているが、今後も Dasgupta 先生と日本の研究者との交流が益々深まることを願いたい。

Dasgupta 先生は、その翌日の 12 日に新幹線で熊本大学へと向かわれた。筆者の日本への帰国半月後に Dasgupta 研に留学された戸田 敬先生を訪問されるためである～テキサスでは筆者が住んでいたアパートの部屋を戸田先生が引き継がれることになったのであるが、ろくに掃除もしていなかったので申し訳なく思ったものである。当日は博多駅までお迎えに来て下さった。熊本大学理学部での Dasgupta 先生の講演題目は、"Measurement of Atmospheric Gases and Particles by Ion Chromatography"である。両先生は協同研究のディスカッションの後、阿蘇山の視察にも行かれた。これは火山性ガスなど大気成分のフィールド測定に関する調査のためである。季節はずれの黄砂で霞んでいたものの、幸いその日は登山規制が解除され、火口見学が可能だったそうである(写真 7)。

離日後、タイそしてインドへ

以上のように、Dasgupta 先生は日本でのスケジュールを精力的にこなされたあと、9 月 15 日に関西国際空港から離日された。タイの Mahidol 大学及び Chiang Mai

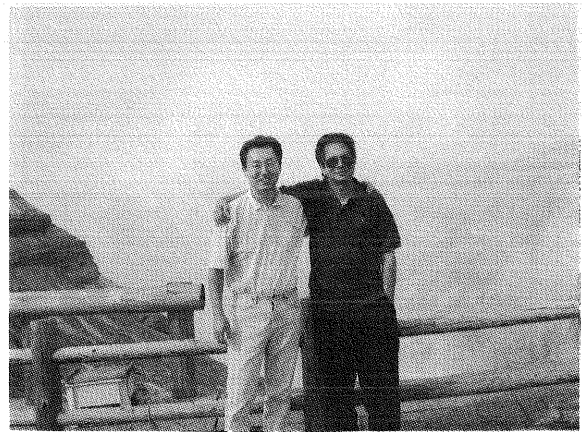


写真7 阿蘇山火口にて
Dasgupta 先生と戸田 敬先生

大学、続いてインドの Calcutta 大学、Jadavpur 大学、Central Leather Research Institute (Chennai)、Indian Regional Lab (Trivandrum)を訪問後、インド国内の御実家へと向かわれた。6 週間の長旅の末、Lubbock には 10 月 15 日に戻られた。タイの訪問先では、宿舎の流しが落下して足に深い裂傷を負われたそうで、杖つき歩行を余儀なくされ誠に災難であった。幸い、米国に帰国される頃にはほぼ回復されたとのことである。

おわりに

筆者にとっては、米国でお世話になった先生をお招きすることができたことは、この上ない喜びであった。国際的に著名な Dasgupta 先生が徳島にお越し下さり、拙宅にも泊まっていただき、そして筆者の家族とも時間を共有して下さったことは、大変名誉なことであり感動的であった。テキサスでの思い出と共に、一生の宝物になるであろう。慌ただしい日程のため、十分なおもてなしができなかったことが心残りである。

今回の Dasgupta 教授の招聘にあたっては、その融通の利かない規則に時には不満も言ったが、やはり藤井・大塚国際教育研究交流資金にはお世話になった。ここに感謝の意を申し上げる。筆者一人でおもてなしするのは大変であったろうし、御多忙な Dasgupta 先生を徳島のみ引き留めることは適切なことではない。岡山や熊本にお招きいただき多大なお力添えを賜った、本水昌二先生と戸田 敬先生に心より感謝の意を申し上げます。酒井忠雄先生からも、有り難いお招きのお言葉を頂戴しました。日程と経路等の関係で実現できなかったことをお詫び致します。また、本稿の執筆にあたっては、大島光子先生、手嶋紀雄先生から岡山の、戸田 敬先生から熊本の情報や写真を提供していただきました。ここに厚く御礼申し上げます。